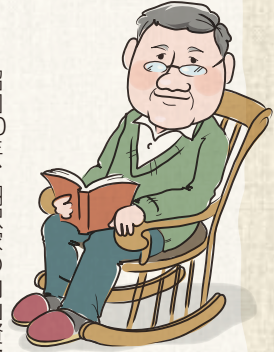


# 「愛犬王 平岩米吉伝」2



著者：片野ゆか  
発行：小学館  
ISBN：9784093897037  
2006年04月20日発売 ¥1,680



昭和10年、翻訳家の内山賢次が持ち込んだ洋書に米吉は驚かせられます。それは野生動物を主人公とした物語で、その優れたストーリーと丁寧に描かれた絵はアーネスト・トンプソン・シートの筆によるものでした。こうして「動物文学」誌上で「私の知る野生動物」と日本語タイトルをつけられ、日本で初めてシートの作品が紹介されたのでした。ところで現在の犬の平均寿命は14〜15歳くらいですが、当時は6〜7歳で現在の半分ほどでした。米吉が愛し、銀座の松屋デパートにまで同行したシエパードのチムもフィリアによってたった4歳と4カ月の短い生涯を終えることになります。米吉はチムを解剖し臓器にからまるフィリアをピンセットで抜き取りその総数は67匹を数えました。当時、米吉が飼育している犬や狼の死因はほとんどがジステンバーとフィリアでした。ことに東洋の風土病といわれるフィリアについては予防法や治療法は全くの手つかずでした。チムのフィリアを見たとき米吉は決心をしました「この日本からフィリアを撲滅したい。」そうして米吉は昭和9年に「フィリア研究会」を設立し、東大の板垣四郎農学博士に研究を依頼し、そ

の資金を募る活動を始めるのです。それから50年後、月1回の錠剤の投与でほぼ完全にフィリアを予防出来るようになったのです。

米吉が約40年間に飼育した70余頭の内、本書にそのエピソードが語られている犬達の名前だけでも紹介しましょう。チム・プッペ・ギンコ・ゲラート・ビルト・イリス・デナ・キング・リリ・そして米吉にとって最後の犬となったチツケ。晩年、米吉が一般の愛犬家に対して心から思っていたことは「犬を飼う人は、自分も愉しく、犬も幸せに、他人に迷惑をかけぬこと」これだけでした。最後に歌集「犬の歌」を著したほどの歌人でもあった米吉が、犬の事を初めて詠んだ句を紹介しましょう。

樹のかげの井戸の真水を手にくくひ、犬にのましめぬ、余震のなかに

大正12年の関東大震災の時に詠んだ句です。そして小生が好きな句をもう1句

今は亡き犬の爪あとおびただし、この床は張り替へがたし

さらに、犬と生きた米吉の人生への想いのすべてが込められた1句を

犬は犬、我は我にて果つべきを命触りつつ睦ぶかなしき